

今回は、「他人と比べない生き方」志賀内 泰弘より紹介します。

沖縄に島袋勉さんという友人がいます。彼は「義足のランナー」として知られています。2001 年 4 月 10 日午後 10 時 5 分頃島袋さんは千葉県船橋の電車の踏み切りで事故に遭いました。意識が戻った時彼は両足を失っていたのです。そのうえ脳の機能障害も起こしてしまい、つい先ほどの出来事さえも忘れてしまう状態になってしまいました。人の顔が 2 つ 3 つにも見えたり、めまいに襲われることも。でも、彼はあきらめませんでした。

妹さんのサポートを得て猛烈な、かつ過酷なりハビリを始めたのです。切断された部分に包帯を巻くと、義足を装着できなくなります。包帯なしで義足をはけば、猛烈な痛みが襲います。それでも「傷の痛みは怖くない。怖いのは歩けなくなることだ」と歩行練習を続けました。歩くだけではありません。彼は「走る」ことにも挑戦します。そして、義足をはいてホノルルマラソンを完走してしまったのです。当然のことながら、猛烈な痛みとの戦いがありましたが、なぜ彼はその戦いに打ち勝つことができたのか。そこには、お母さんの一言があるといいます。病院でリハビリをしている時、お母さんに電話をしました。すると「痛い？」と聞かれました。傷の周辺を氷で冷やし、痛み止めを飲み坐薬まで使って痛みを耐えているのです。「そりゃ痛いよ」と答えました。するとお母さんは、「そんなに痛い思いをして何も学ばなければただのバカだよ。アハハハ」と笑って言ったのでした。島袋さんは、「自分は何を言ってもらいたかったのだろうか」と自問したそうです。「痛いでしょう大丈夫？」といった同情の言葉を期待していたのでした。その時、ハッと気付いたそうです。「これがいけないんだ」と。長く病院生活を続けていると、同情の言葉にすっかり慣れてしまう。この時から、日々の努力の中から何かを学ぼうとす意識するようになり、周囲の光景がいろいろな色に変わって見えるようになったといいます。人は、辛いことがあると失望します。「なんて私は不幸なんだろう？」と思います。1 つ何かを失うと、人生が真っ暗闇ですべてを失ったような気持ちに陥ってしまう。そこで大切なことまで見失ってしまうのです。マイナスの出来事にも必ず「意味」があります。その意味に気づくと、マイナスの出来事すらプラスに思えて「ありがとう！」と感謝できるようになります。私自身にも 1 つ思い当たることがありました。大病をした時のことです。生死をさまよいつつも、無事回復して退院できました。しかし、治療の後遺症に苦しみ「もう俺の人生は終わりだ」と落ち込んでいました。そんな時、あるお医者さんに言われました。「病気は気付きです。なぜそうなったのか、気付いて学ぶことが大切です。何かを気付かせるために、神さまがあなたを病気にしてくださったのです」その言葉のおかげで、自分の考え方や心の持ち方を変える努力をするようになりました。そうして初めて感謝の心がわかったのです。すると、病気にすら感謝できるあなたの目の前にも「ありがとう」と言える「幸せ」がいっぱいあるはずですよ。

Q 1 : 島袋さんが、母親に何と言ってほしかったのですか？

A 1 : ( )

Q 2 : マイナスの出来事にも必ず「意味」があると感じた事はありますか？

A 2 : ( )